

おかあさんのなみだとぼくの未来

山下 悠太^{やました ゆうた}

「どうしてぼくには兄弟がいないの。」

ぼくは少し前まで、お母さんにこんな質問をよくしていた。だって兄弟がいたら、いっしょに遊べるし、食事中もおしゃべりできて楽しい。友達もよく兄弟の話をしている。ケンカをするんだって。どんな風にもケンカになって、どうやって仲直りするんだろう。ぼくも兄弟げんかしてみたい。たまに、友達やいとこと遊ぶと本当に楽しくて、ぼくの中の楽しい気持ちメーターがふり切つてとんでいっちゃいそうなくらい楽しい。兄弟がいつもいっしょなら毎日楽しいはずだ。お母さんは、物知りで、おしゃべりで、大体やさしい。でもこの質問の答えはいつもいっしょ。ごめんね、と小さな声でうつむいて話すだけ。

この間、お母さんがいつもより早く仕事から帰つて来た。具合がとて悪そうだった。すぐにふとんに入つたけど、ふとんの中で泣いているみたいだった。とても心配で、急いで冷ぞうこから冷たいスポーツドリンクを取つて、お母さんの枕の近くに置いた。お母さんは、ぼくの手をギュつてにぎった。仕事中に気分が悪くなつて、クラクラしたそうだった。貧血という病気が原因らしい。おぼあちゃんに聞いたら、ぼくがお母さんのおなかにいたころから貧血という病気になって、ぼくを産んだ後も、まだ治らない。ぼくのせいなのか少し不安になって、くわしく聞いてみた。おぼあちゃんは、口の前で人差し指を立てて、シーって、ないしょ

のポーズをしてから色々教えてくれた。ぼくがお母さんのおなかにきて、とてもみんなでよろこんだこと、でも体の弱いお母さんは何度もぼくを流産しそうになってピンチになり入院したことが、入院中はいろんなきかいや点滴を付けられていたこと。そして、やっと命がけでぼくを産んでくれたこと、他にも色々聞いたけど、とても大変で、いたそうなことばかりだった。お母さんの体は、ぼくを産むことでせいっぱいだったんだ。

「なんだかごめんね。」

ぼくはお母さんに、おぼあちゃんに聞いたことを話してみた。そうしたら、お母さんは、

「体が弱いのは仕方がなくて、悠太が生まれてきてくれてからの方が、お母さんはがんばられているし、楽しいの。ありがとう。」と言ってくれた。

でも体がじょうぶになったら、お母さんは薬になるし、悲しいことが少なくなるんじゃないかなと思つた。ぼくは、血をみたりするのが苦手だからお医者さんにはなれないけれど、病気を治す薬なら作れるんじゃないかと思う。そうしたら、お母さんの病気も、おじいちゃんのがしがいたいのも、おぼあちゃんのお心ぞうがいたいのも、治せるかもしれない。ぼくはワクワクしてきた。しよう来ぼくは、薬を研究する人になりたい。こちらこそ、お母さん、ぼくを産んでくれてありがとう。